

松江市文化財調査報告書 第129集

農村振興総合整備事業 ため池等整備事業予定地内 理藏文化財発掘調査報告書

石の堂遺跡発掘調査報告書

平成21(2009)年11月

松 江 市 教 育 委 員 会
財団法人松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第129集

農村振興総合整備事業 ため池等整備事業予定地内 理藏文化財発掘調査報告書

石の堂遺跡発掘調査報告書

平成21(2009)年11月

松 江 市 教 育 委 員 会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　　言

1. 本書は、平成18年度に国庫補助を受けた、ため池整備事業（石の堂池）に伴う石の堂遺跡発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、島根県松江県土整備事務所から松江市教育委員会が委託を受け、財團法人松江市教育文化振興事業団が実施した。
3. 調査地は、島根県松江市岡本町104番地外に所在する。
4. 現地調査の期間は、以下のとおりである。
平成18年5月11日～5月31日・8月1日～8月8日まで。
5. 開発面積及び調査面積は、以下のとおりである。

開発面積 2,600m²

調査面積 280m²

6. 調査組織は以下のとおりである。

平成18年度

【発掘調査】	〈調査主体者〉 松江市教育委員会	教育長 福島 律子
		参事 岡崎雄二郎
	事務局 文化財課	調査係長 飯塚 康行
		主任（事務担当者）後藤 哲男
	〈調査指導〉 島根県教育委員会 文化財課	勝部 智明
	〈実施者〉 財團法人松江市教育文化振興事業団	理事長 松浦 正敬
	埋蔵文化財課	課長 廣江 真二
		調査係長 清古 謙子
		主任（事務担当者）門脇 誠也
		調査担当者 落合 昭久
		調査補助員 秦 愛子

平成21年度

【報告書】	〈調査主体者〉 松江市教育委員会	教育長 福島 律子
	事務局 文化財課	課長 吉岡 弘行
		調査係長 飯塚 康行
		主任 川上 昭一
	〈実施者〉 財團法人松江市教育文化振興事業団	理事長 松浦 正敬
	埋蔵文化財課	課長 廣江 真二
		課長補佐 鍾織 慶樹
		主任（事務担当者）門脇 誠也
		調査担当者 落合 昭久
		調査補助員 秦 愛子

7. 本書の刊行に当たっては、出土遺物について、廣江耕史氏（島根県埋蔵文化財調査センター）に有益なご指導、ご教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。
8. 本書に掲載した遺物・遺構図の実測・浮遊・観察は、秦が行なった。
9. 本書に掲載した現場写真・遺物写真は、落合、秦が撮影した。
10. 本書の執筆・編集は、松江市教育委員会文化財課の協力を得て、秦が行なった。
11. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海拔標高を示す。
12. 出土遺物、実測図及び写真等の資料は、松江市教育委員会において保管している。

目 次

例言

第1章 調査に至る経緯 1

第2章 遺跡の位置と歴史的環境 2

第3章 調査の経過と方法 4

第4章 発掘調査の成果 6

第5章 まとめ 17

遺物観察表 19

写真図版

抄録

挿図目次

第1章	第8図 T-1 平面図・上層断面図
第1図 島根県・松江市位置図	第9図 T-2 平面図・上層断面図
第2章	第10図 第4層出土遺物①
第2図 石の堂遺跡位置図	第11図 第4層出土遺物②
第3図 周辺の遺跡分布図	第12図 第4層出土遺物③
第3章	第13図 第4層出土遺物④
第4図 石の堂遺跡 工事・調査範囲図	第14図 第8層出土遺物
第5図 石の堂遺跡 工事・調査範囲図	第15図 第3次調査 平面図・土層断面図
第4章	
第6図 石の堂遺跡 調査区全体図	
第7図 第1次・第2次・第3次調査 位置図	

写真図版目次

図版1	調査前遠景（南東から）
	調査前近景（南から）
図版2	第1次調査 埋め戻し前（東から）
	第1次調査 埋め戻し後（南から）
図版3	第2次調査 T-1 (A-A') 土層断面（南から）
	第2次調査 T-2 自然流路跡検出状況（南西から）
図版4	第2次調査 T-2 (B-B') 土層断面（北東から）
	第2次調査 T-2 (C-C') 土層断面（南東から）
図版5	第3次調査 挖削状況（南西から）
	第3次調査 D-D' 土層断面（西から）
図版6	第4層出土遺物
図版7	第4層出土遺物
図版8	第4層出土遺物
図版9	第4層出土遺物
図版10	第4層出土遺物・第8層出土遺物

第1章 調査に至る経緯

松江市秋鹿町に所在する石の堂池は、堤体及び取水施設の老朽化により、地域安全度の低下や水管理労力の増大が問題となっていた。堤体決壊による被害も懸念されることから、島根県では、地域の防災安全度の向上、水利用の合理化、ため池管理労力の節減と効率化を図ることを目的として改修工事を実施することとなった。

この事業に先立ち、平成17年12月1日に島根県農林振興センター（現島根県松江県土整備事務所）から松江市教育委員会あてに、事業計画域における埋蔵文化財の分布調査依頼書が提出された。依頼を受けた当市文化財課では、同年12月27日に対象地の分布調査を実施し、工事予定地内により詳細な試掘調査を必要とする場所2箇所を確認し、平成18年1月4日付け松教文第528号で回答した。

この後、平成18年2月22日に試掘調査を実施したところ、堤体下の休耕田に設定したT2トレンチから、遺物包含層と自然河道のような溝の存在を確認した。このため、当地の小字名をとって『石の堂跡』として文化財保護法上の手続きをとり、工事計画の変更が困難なT2トレンチ周辺については、平成18年5月11日から本発掘調査を実施することとなった。

なお、本発掘調査については財団法人松江市教育文化振興事業団へ業務委託することで実施している。



第1図 島根県・松江市位置図

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

石の堂遺跡は、松江市岡本町に所在する。本遺跡の南側には宍道湖が広がっており、辺り一帯は、南北に派生する低丘陵地帯が連なる。これら丘陵の山間には小河川が発生し、宍道湖に流れ込んでいる。元来この地の人々は、これらの小河川を利用して、田畠、水田を作り、生活の基盤を築いていったものと思われる。そして、低丘陵上や麓には、数多くの集落・埋葬施設が営まれた。

本遺跡である石の堂遺跡（1）は、宍道湖に程近い丘陵の南東側裾部に所在する。遺跡の北西側には「石の堂池」と称される農業用貯水のため池が所在し、ため池の堤体下は水田として利用されていたが、近年は休耕地となっていた。

以下、周辺の遺跡について時代を追って概観する。なお、縄文時代の遺跡は、現時点では発見されていない。弥生時代は、新宮遺跡（2）で弥生土器が出土しているが、遺構は確認されていない。

古墳時代 本遺跡の北に位置する丘陵上には、多くの古墳・古墳群が発見されている。南から、狐松古墳（3）、丘陵の尾根に沿って北西方向に、崎山古墳群（4）、桑地山古墳（5）、三栗屋奥古墳群（6）、石曳古墳（7）、横木古墳群（8）が連なって造られた。秋鹿川を挟んで東側の丘陵上には、亀割坂古墳（12）、方墳7基を有する廻田古墳群（13）が所在し、北東に向かうと、雲岸寺古墳（21）、雲岸寺東古墳群（23）などがある。この丘陵は南西方に向び、最南は宍道湖に面する小高い丘である。ここに



第2図 石の堂遺跡位置図 (S=1:80,000)

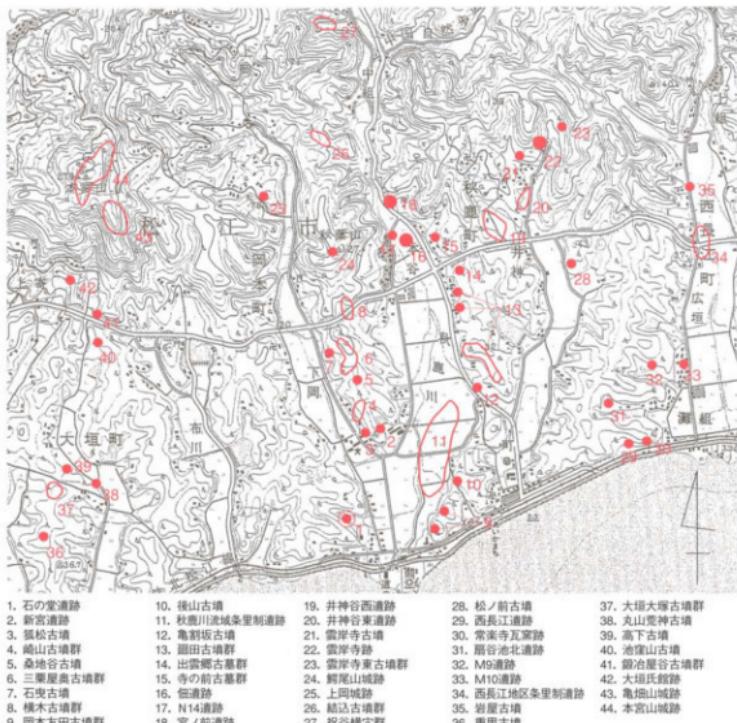
岡本友田古墳群（9）、後山古墳（10）が造られた。秋鹿川の上流には、25穴の横穴墓を確認した祝谷横穴群（27）、結込古墳群（26）が所在する。石の堂遺跡からほぼ真西、大垣町の低丘陵上には、重里古墳（36）、大垣大塚古墳群（37）、丸山荒神古墳（38）、高下古墳（39）が集中して造られており、北側には池窪山古墳（40）、鍛冶屋谷古墳群（41）が造られた。

このように、古墳時代には多数の古墳・横穴墓が造られており、その周辺には、佃遺跡（16）、宮ノ前遺跡（18）、井神谷西遺跡（19）、井神谷東遺跡（20）、西長江遺跡（29）、扇谷池北遺跡（31）、M9遺跡（32）、M10遺跡（33）などの、須恵器・土師器散布地が点在する。

歴史時代 奈良・平安時代になると、平地部分には秋鹿川流域条里制遺跡（11）、西長江地区条里制遺跡（34）など、条里制の痕跡を示す遺跡が確認されている。

中世以降には、丘陵上に数多くの山城跡が築かれるようになる。石の堂遺跡から真北に向かった秋葉山には、鶴尾山城跡（24）、北西方向に上岡城跡（25）が、大垣町の北に位置する本宮山には本宮山城跡（44）、亀畠山城跡（43）が存在していたことが分かっている。

島根県教育委員会『島根県遺跡地図I』(出雲・隠岐編) (2003)



第3図 周辺の遺跡分布図 (S=1:25,000)

第3章 調査の経過と方法

本調査は、島根県松江県土整備事務所発注の、ため池整備事業に伴い行なったものである。ため池工事によって影響を受ける平面積は、約2,600m²を測る。

試掘調査の結果を踏まえ、平成18年5月11日から、ため池の南東側の約280m²の範囲を対象として発掘調査（便宜的に第1次調査とする）を行なうこととなったが、調査中に堤体が崩壊し調査区に流れ込む恐れが生じたため、事業者と協議を行ない、一旦調査区を埋め戻し調査を一時中断した。

その後、島根県教育委員会と今後の調査方法についての協議を行ない、平成18年8月1日から8月8日にかけてトレンチ調査（便宜的に第2次調査とする）を実施し、土層の堆積状況の把握を行なった。その結果T-1で遺物包含層、T-2で同遺物包含層、最下層に自然流跡を検出した。

なお、ため池の堤体直下部分についても遺跡が存在する可能性が考えられたが、ため池に水が溜められている現状での調査は困難であり、改修工事の際に工事立会という形で上層の堆積状況の確認を行なった（便宜的に第3次調査とする）。

記録写真は、遺構写真に6×7判一眼レフを主に、35mm判一眼レフを補助に用いた。各判共にカラーリバーサル、モノクロフィルムで撮影を行なった。また、遺物写真是、35mmデジタル一眼レフを使用し、デジタルデータ（JPEG）で保存している。



第4図 石の堂遺跡 工事・調査範囲図 (S=1:5,000)



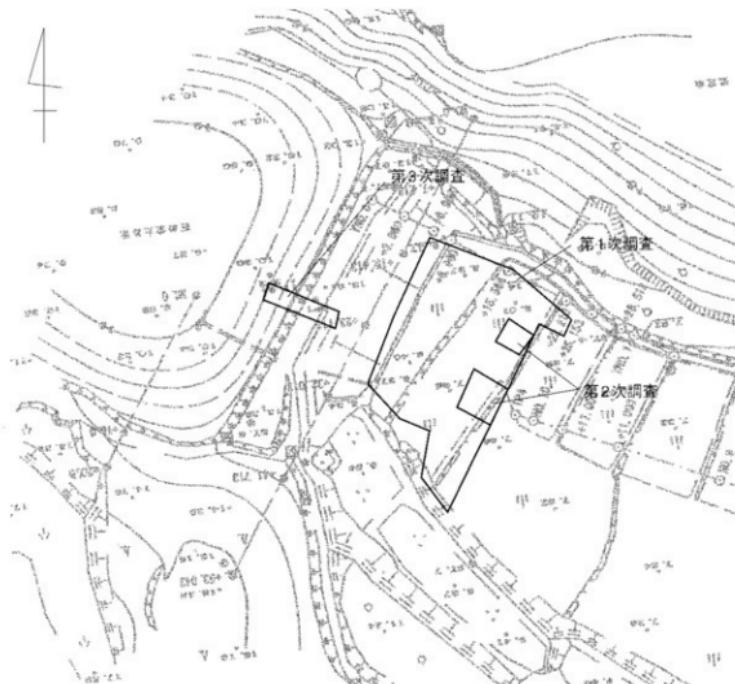
第5図 石の堂遺跡 工事・調査範囲図 (S=1:1,000)

第4章 発掘調査の成果

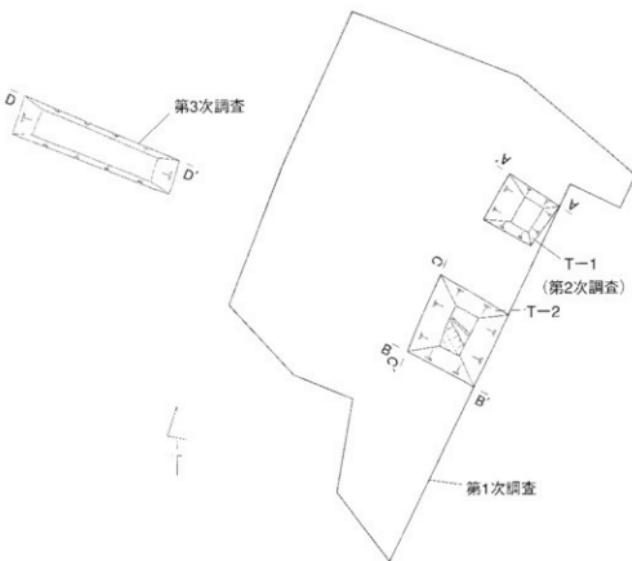
今回の石の堂遺跡の調査では、第3章で述べた通り、遺跡有無確認のための試掘調査、堤体崩壊の危険性を考慮し一時中断した調査を便宜的に第1次、その後のトレーニング調査を第2次、工事立会調査を第3次調査と呼称している。以下、各調査の概略を記す。

1. 第1次調査（第6図・第7図）

第1次調査は、石の堂池の堤体下端に沿う位置に、約280mの範囲で設定し行なった。現地表面から約1mを掘り下げた時点で、調査区の壁面の崩落が始まり、ため池の堤体にも影響を及ぼす恐れが生じたため、調査を一時中断し、調査区全体の埋め戻しを行なった。遺物包含層まで掘削が及んでいたため、遺物は出土していない。なお、土層断面等の図化は困難であり、埋め戻し前の写真（図版2）を掲載するに留めた。



第6図 石の堂遺跡 調査区全体図 (S=1:500)



第7図 第1次・第2次・第3次調査位置図 (S=1:500)

2. 第2次調査（第7図～第9図）

第2次調査は、第1次調査の埋め戻し後に行なったもので、面的な調査ではなく、土層の堆積状況を確認することを目的としたトレンチ調査である。堤体の崩落に影響が少ないとと思われる調査区の南東側に、T-1 (3.0×2.5m)・T-2 (4.5×4.0m) の2箇所のトレンチを設定し、調査を実施した。その結果、T-1で遺物包含層、T-2で同遺物包含層と、最下層に自然流路跡を検出した。

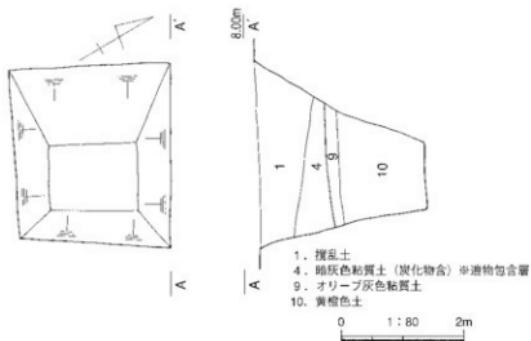
なお、T-1・T-2の各土層は共通する上層と考えられるため、同一の上層番号・土層名で説明を行なっている。

I 土層堆積状況（第8図・第9図）

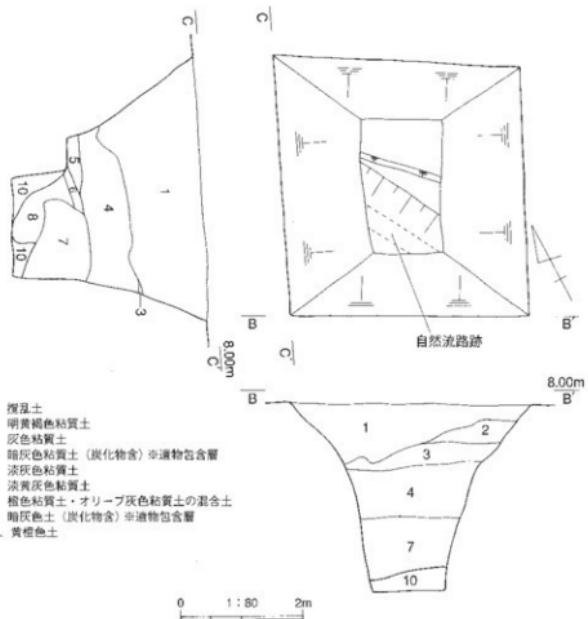
調査の結果、両トレンチから遺構を検出するには至らなかったが、現地表面から約1.5m掘り下げた位置で、遺物包含層（4層）を、その下位に自然流路跡（T-2の8層）を検出した。以下、土層順に詳細を記す。

1層（搅乱土）は、第1次調査時、壁の崩壊を未然に防ぐために埋め戻しを行なった際の土である。
2層（明黄褐色粘質土）は、水田等に起因する近代の上層と思われる。

3層（灰色粘質土）・4層（暗灰色粘質土）は、いずれも粘性の強い粘土層で、4層は現地表面から約1.5m下に堆積し、厚みは約1mを測る。また、炭化物を多量に包含している。土層の厚さ、粘土質の顯著さ等から考慮すると、ある程度の長期間を要して堆積した可能性が推測出来る。



第8図 T-1平面図・土層断面図 (S=1:80)



第9図 T-2平面図・土層断面図 (S=1:80)

5層（淡灰色粘質土）・6層（淡黃灰色粘質土）は、7層（橙色粘質土・オリーブ灰色粘質土の混合土）が入り込むと同時に流れ込んだ層と推察する。7層は、8層（暗灰色粘質土）を抉るように入り込み、その上に5層・6層が堆積したと考える。

8層（暗灰色粘質土）は、粘土と砂が入り込み、炭化物や木片を多量に包含していた。また、水の流れを示す砂を確認していることから、自然流路の堆積土と推察する。この流路跡は谷の地形に沿っており、北西から南東方向に流れていたと思われる。

遺物は、4層からの出土が最も多く、須恵器・土師器が出上している。須恵器は、壺蓋・壺類・高坏・長頸壺・鉢・甕、土師器は壺類、複合口縁の甕・壺が見られる。これらの遺物は破片ばかりで、完形のものは出土していない。焼成不良の割合が高く、摩滅しているものが多数見られた。

8層からは、弥生土器の甕の口縁部小片、底部小片が出上している。

以下、出土層別に遺物の詳細を記す。

II 出土遺物

第4層 出土遺物（第10図～第13図）

【須恵器】

10-1・2は壺蓋で、いずれも器高が低く扁平形を呈する。10-1は、輪状つまみ部分を含む天井部の破片で、つまみ高は0.3cmを測る。10-2は天井部から口縁部にかけての破片で、端部は垂直に屈曲する。これらの年代は、7世紀末～8世紀前半を示すものと考える。

10-3・4は高台付壺で、いずれも高台が垂直に貼り付くものである。10-4の高台は高く、わずかに内傾する。

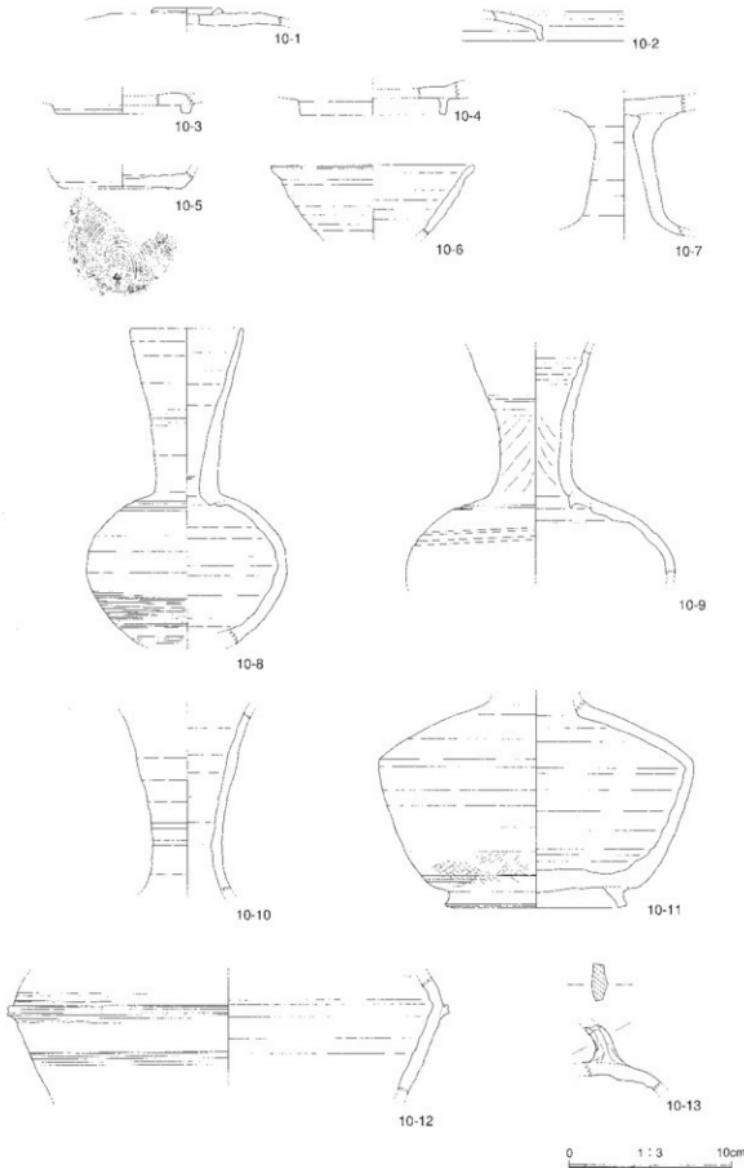
10-5は無高台の壺で、底部の破片である。底部は若干上げ底氣味で、回転糸切りを施す。

10-6は、逆「ハ」字状に大きく開く壺で、口縁部から体部にかけての破片である。体部は直線的に伸び、口縁部付近で外反する。また、焼成が甘く軟質である。

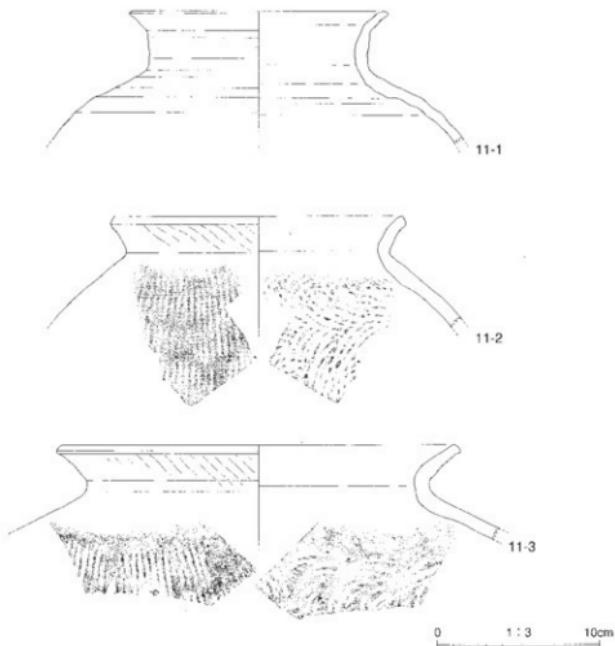
10-7は高壺で、壺底部から端部を除く脚部の破片である。厚手の作りで重量感があり、透かしは見られない。脚部下方で明確に折れ、外側に開く。

10-8～11は、長頸壺である。10-8は、口頸部から体部下方まで残存するもので、頸部は細長く、口縁部付近でわずかに内湾する。体部中央に最大径部分をもち、丸く張り出す。また、頸部中央と肩部に、明確な沈線が2条ずつ廻る。底部付近の外面には、カキ目調整が薄く残る。10-9は、頸部から体部最大径付近までの破片である。頸部は緩やかに外反し、体部は丸みをもつ。頸部の外内面にはしばり痕が見られ、また、頸部と体部の接合時の痕跡が確認出来る。沈線は、頸部や上方に2条、肩部に1条、その下に2条を廻らす。10-10は、頸部の破片である。頸部下方に2条の沈線を廻らす。10-11は、体部以下が残存し、最大径部分の屈曲が非常に明確なものである。体部下方の外面には平行叩き文の痕跡が薄く残る。底部は回転糸切りの後、「ハ」字状の高台を付けている。

10-12・13は平瓶と思われるもので、10-12は体部の破片である。体部最大径に突帯が貼り付けられており、突帯の上下にはカキ目調整が廻る。10-13は手持ち状の把手で、貼り付け部分の破片である。10-12・13は、同一個体の可能性も考えられる。



第10図 第4層 出土遺物① ($S = 1:3$)



第11図 第4層 出土遺物② (S=1:3)

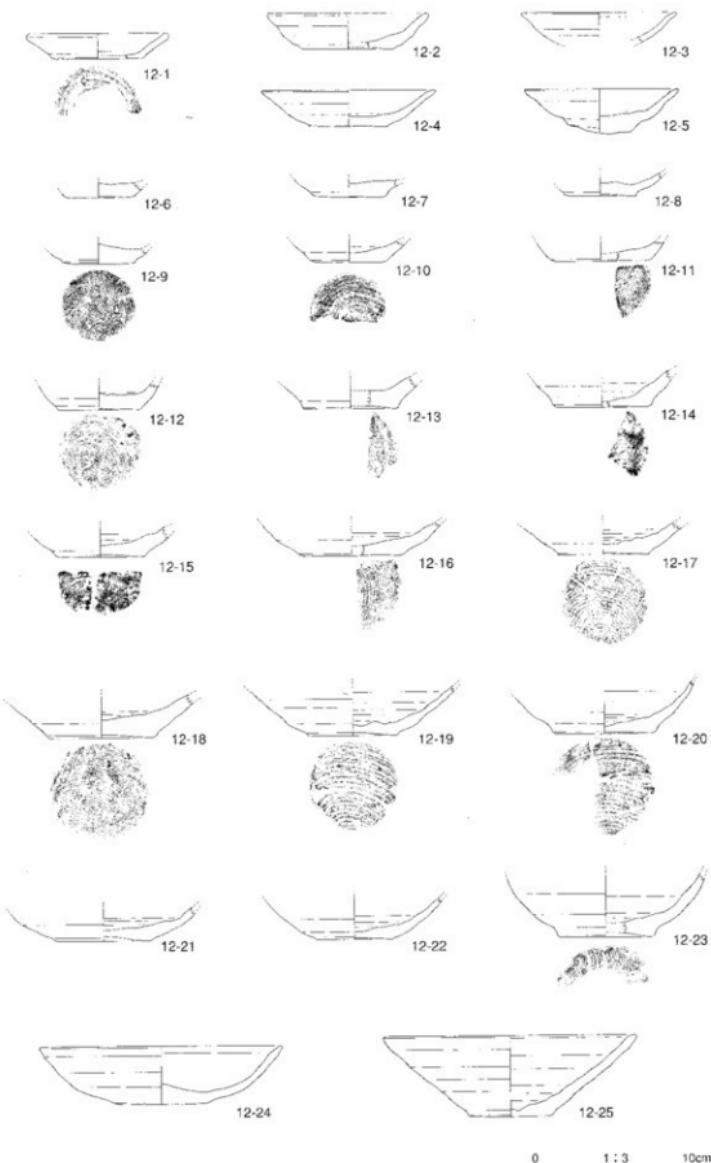
11-1～3は甕で、口縁部から肩部付近にかけての破片である。11-1の口縁部は垂直に立ち上がり、端部付近で大きく外側に折れ、端部は先細り尖る。肩部以下は丸みを帯びて下りる。11-2・3の肩部以下の調整は、外面は平行叩き文、内面は同心円状當て具痕が明確に残るものである。また、口縁部外面に、斜めに走る平行叩き文が見られ、回転ナデによって消されている痕跡が確認出来る。

10-1～11-3は、8世紀代～10世紀代におさまるものと考える。

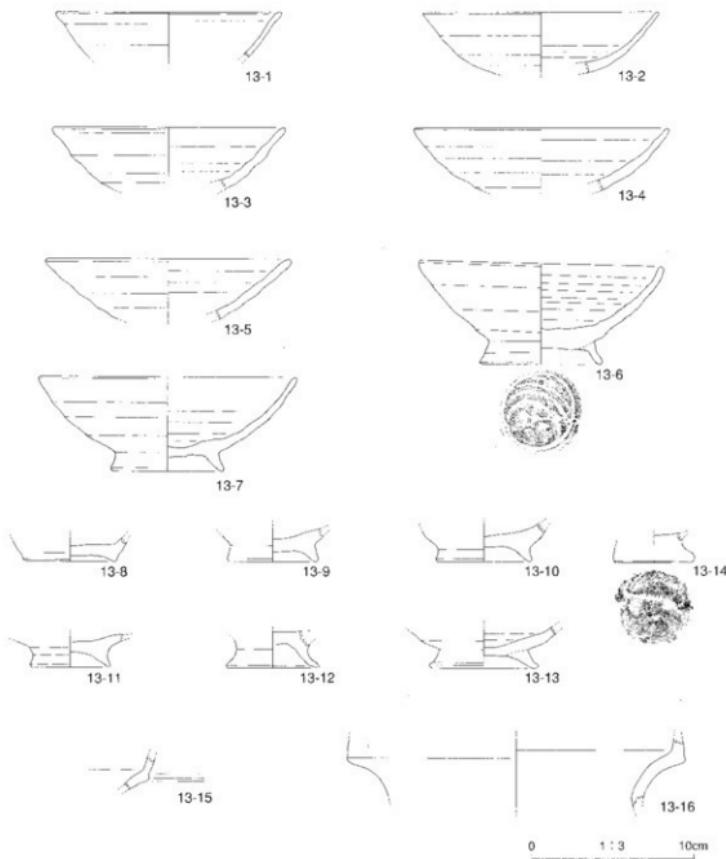
【土師器】

12-1～5は、口径10.0cm前後を測る小形環である。12-1・2は、肥厚氣味で直線的に開き、12-3～5は、口縁端部付近で外反する。また、12-5の底部は、厚手で波打つような形狀を呈し、整った成形が成されていない。

12-6～25は、無高台の坏である。12-6・7・9は底部の破片で、それ以外は体部下方から底部の破片である。底部は回転糸切り、もしくは静止糸切りを施す。12-6～10は、底部径が5.0cm以内におさまるものである。12-11・12・21・22は、底部からの立ち上がりに若干丸みをもつもので、12-13～20は、底部付近が括れるものである。12-23は厚手の作りで、底部は上げ底で明確に作られ、体部は丸く内湾して立ち上がる。12-24・25は、口縁部から底部まで残存するものである。12-24は扁平形を呈し、底部は中心に向かって厚手となる。口縁端部付近で肥厚し、端部は先細り尖る。12-25



第12図 第4層 出土遺物③ (S= 1:3)



第13図 第4層 出土遺物④ (S=1:3)

は厚手の作りで、底径が小さいのに対し、体部の開きが大きく直線的である。

13-1～5は、口縁部から体部下方にかけての破片で、高台の有無は不明の环である。13-1・2は薄手の作りで、13-1は口縁端部で外反し、13-2は緩やかに内湾して立ち上がる。13-3・4は、わずかに内湾気味の体部で、若干肥厚する。13-5の体部は直線的に開く。

13-6～14は、高台付环である。13-6はほぼ完形に近い状態である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部付近でわずかに内傾し、端部は丸くおさめる。高台は「ハ」字状に開き、接地部分は丸みをもつ。底部には、回転糸切り痕が明確に残る。13-7は、13-6とよく似た形状のものであり、体部は薄手の作りで内湾する。底部から高台にかけて厚手となり、高台は「ハ」字状に開く。



第14図 第8層 出土遺物 ($S=1:3$)

13-8・12・14は、高台部分を含む底部の破片で、13-9～11・13は、体部下方から高台部分を含む底部にかけての破片である。13-8の高台は非常に低いものだが、わずかに貼り付けの痕跡が見られる。13-9・10は、「ハ」字状に開く高台をもつ。13-11の高台は直線的に尖り、13-12の高台は「ハ」字状に強く外反する。13-13は、高台の端部が横に張り出す形状を呈する。13-14は柱状高台を持つもので、底部は静止糸切りを施す。13-1～14は、9世紀後半～12世紀代におさまるものと考える。

13-15は、複合口縁の壺である。口縁稜部分のわずかな小片で、稜は緩やかに成形されている。弥生終末期に該当すると思われる⁽¹⁾。

13-16は、複合口縁の壺である。口縁部の稜が強く外反して張り出す様相から、草田5期のものと考える。

第8層 出土遺物（第14図）

【弥生土器】

14-1は壺で、口縁端部の小片である。端部外面には、かなり摩滅しているが凹線が引かれている。また、内面には粘土塊の剥離痕のようなものが確認出来、円形浮文等の痕跡ではないかと推測する。

14-2は壺で、口縁部の小片である。復元口径は16.4cmを測り、口縁部は外方に開き、端部擴張部分には2条の凹線文が引かれている。

14-3は壺か甌の、底部の小片である。底径は5.0cmを測り、平底である。

14-1～3は、上記の形状・施文等から考慮すると、いずれも弥生時代中期頃のものと考える⁽²⁾。

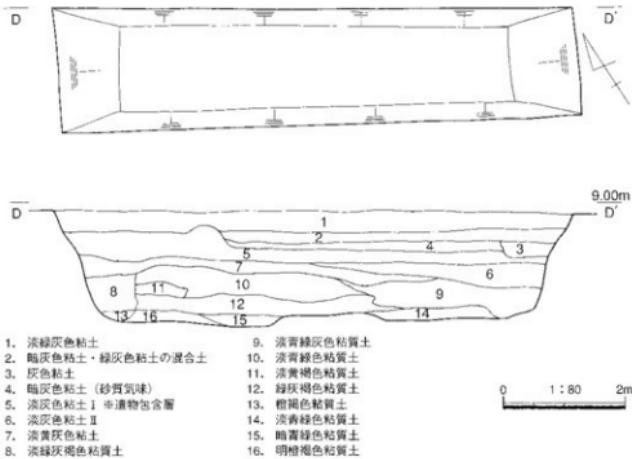
3. 第3次調査（第7図・第15図）

第3次調査は、堤体直下部分の遺跡の有無を確認するために実施した調査である。しかし、ため池に水が溜められている段階での調査は困難であることから、ため池改修工事の際に、工事立会という形で調査を行なった。

調査区は、第2次調査を行なった位置から約11m北西に向かった所に、7.0×1.5mのトレーンチを設定した。

土層堆積状況

1層（淡緑灰色粘土）、2層（暗灰色粘土・緑灰色粘土の混合土）、3層（灰色粘土）、4層（暗灰色粘土）は、水平に堆積する土層である。4層は砂質を若干含む。5層（淡灰色粘土Ⅰ）、6層（淡灰色粘土Ⅱ）は同様の土質だが、5層で遺物を確認している。7層以下は、いずれも土質が酷似する粘土層



第15図 第3次調査 平面図・土層断面図 ($S = 1:80$)

で、炭化物や自然木片、遺物等を一切含まない無遺物層であった。

遺物は、5層からのみ出土しており、須恵器の壺・甕、土師器の壺が出土している。いずれも焼成不良で摩滅が著しく、小さな破片の状態であった。年代は、8世紀～9世紀代と考えてよいだろう。

《注釈》

- (1) 鹿島町教育委員会「講武地×県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草山遺跡」(1992)
- (2) 松本岩雄「出雲・播磨地域 山陽・山陰編」「弥生土器の様式と編年」木耳社 (1992)

参考文献

- ・柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古 第3号』(1980)
- ・鳥取県教育委員会『高広沼跡発掘調査報告書』(1984)
- ・松江市教育委員会『中竹矢1号墳・長峯遺跡』(1986)
- ・鳥取県教育委員会『石台遺跡・馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告』(1986)
- ・鳥取県教育委員会『神田遺跡・北松江幹線新設工事・松江漁港新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(1987)
- ・鳥取県教育委員会『天満谷遺跡・北松江幹線新設工事・松江漁港新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』(1987)
- ・鳥取県教育委員会『中竹矢遺跡・一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X』(1992)
- ・廣江耕史「鳥取県における中世土器について」『松江考古 第8号』(1992)
- ・大谷是二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『鳥取考古学誌 第11号』(1994)
- ・本次町教育委員会『妙見山遺跡発掘調査報告書』(1995)
- ・鳥取県教育委員会『門生黒谷I遺跡・門生黒谷II遺跡・門生黒谷III遺跡(門生山根1号窯・門生黒谷1号窯・五反田古墳群)』(1998)
- ・鳥取県教育委員会『一田谷遺跡(vol.1)斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V』(1999)
- ・鳥取県教育委員会『城小路西遺跡・一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書2』(1999)
- ・鳥取県教育委員会『中山谷遺跡・塙山古墳・下がり松遺跡・角谷遺跡法古開地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(2002)
- ・廣江耕史「出雲における中世須恵器について」
『第3回山陰中世土器検討会 資料集 中世須恵器の生産と流通—山陰地方を中心にして—』(2003)
- ・平田市教育委員会『木舟窯跡群』(2004)
- ・丹羽野裕「出雲の須恵器窯」『須恵器窯跡構造資料集2』(2004)
- ・丹羽野裕「出雲における9～10世紀の須恵器の様相—窯跡のその出土資料を中心に—」
『第4回山陰中世土器検討会 資料集 平安時代前期の上器様相—中国地方を中心に—』(2005)
- ・林健亮「史蹟出雲国府跡出土の上器について」
『第4回山陰中世土器検討会 資料集 平安時代前期の土器様相—中国地方を中心に—』(2005)
- ・大阪府立近つ飛鳥博物館『大阪府立近つ飛鳥博物館図録40 年代のものさし—陶色の須恵器—』(2006)
- ・廣江耕史「出雲の土器様相」
『第5回山陰中世土器検討会 資料集 山陰における中世前期の諸様相—伯耆・出雲を中心として—』(2006)
- ・松江市教育委員会／財團法人松江市教育文化振興事業団『岩沙室跡発掘調査報告書』(2009)

第5章　まとめ

今回の調査では、遺構は検出されなかったが、多量の須恵器・土師器を含む遺物包含層と、自然流路跡を検出した。

遺物包含層（4層）は、厚い堆積状況を示す粘土質の上層であった。ここから出土した須恵器は、一部7世紀代のものを含む以外は、およそ8世紀末～10世紀代のものと考えられる。上層器は9世紀後半～12世紀代を示す。また、わずかではあるが、弥生終末期を示す複合口縁の甕・壺の小片も出土した。

堆積土8層は、谷の奥側（北西）から平野部（南東）に向かって、地形に沿うように流れていた自然流路の埋土であった。この埋土には水の流れを示す砂の堆積が認められ、炭化物や自然木片を包含していた。調査区内で確認したこの自然流路跡は、下端幅推定約1.0m（上端幅不明）、深さ推定約2.0mの規模を測り、弥生土器の壺・甕が出土している。遺物の時期は、弥生時代中期頃を示すものと考える。

調査区内で確認した堆積土は、いずれも本遺跡が所在する谷の周辺から流れ込んだものと推察する。まず、前述の遺物包含層（4層）は、短期間で一気に流れ込む土石流などとは異なり、長い年月を経て堆積した土層である可能性が高いと考える。これは、遺物が弥生時代終末期～12世紀代の時期幅をもつことからも推察出来る。また、摩滅した小片の状態で出土したにも関わらず、接合が相当数可能であり、中には完形品に復元出来た遺物もあった。これらのことから、本遺跡の周辺には、未だ見ぬ集落跡等の遺構が存在し、そこから遺物が流れ込み、堆積したものと考えられる。

その他、自然流路跡の埋土（8層）は、弥生時代中期を示す遺物を包含していたことから、少なくともその時代には、本遺跡周辺に人々の生活基盤が築かれていたものと推察出来る。

現在、岡本町内の宍道湖に向かって派生する丘陵上には、多くの古墳や土器散布地が発見されている。しかし、石の堂遺跡が存在する周囲の丘陵において、遺構の確認は成されていない。前述の通り、本遺跡の周辺に未だ見ぬ遺構が存在し、その遺物が谷部へ流れ込んだとするならば、石の堂遺跡が所在する周囲の丘陵上にも、他丘陵と同じ様に集落跡や埋葬施設等の遺構が存在しているものと推察出来よう。

今回の調査では、石の堂遺跡が所在する周囲の丘陵に遺跡が存在する可能性や、自然流路跡の検出から弥生時代の遺構の可能性を見出すことが出来た。これらは、岡本町地域の弥生時代から12世紀代の人々の営みの一端を垣間見ることが出来た、貴重な資料になり得たと言えよう。

遺物觀察表

掲載番号	種別	器種	残存状況	法量 cm			色調		備考
				口径	底径	高	外面	内面	
10回-1	須恵器	壺蓋	大井部片	つまみ径4.4	(1.1)	青灰	青灰	輪状つまみ	
10回-2	須恵器	壺蓋	大井部一口縁部小片		(3.2)	青灰	青灰		
10回-3	須恵器	高台付壺	底部小片	(8.4)	(1.3)	青灰	黄灰		
10回-4	須恵器	高台付壺	底部小片	(9.0)	(2.0)	黄灰	黄灰	底部回転糸切り	
10回-5	須恵器	壺	底部片	7.2	(1.1)	青灰	明黄灰	底部回転糸切り	
10回-6	須恵器		口縁部一体部片	(12.6)	(4.3)	暗灰	黄灰	軟質	
10回-7	須恵器	壺	壺底部一部片	脚部径3.6	(8.6)	灰	灰		
10回-8	須恵器	長頸壺	口縁部~体部下方片	(7.0)	(19.3)	灰	灰白	体部下方外面にカキ目調整	
10回-9	須恵器	長頸壺	頸部~体部片	強径4.4	(14.1)	灰			
10回-10	須恵器	長頸壺	頸部片	頭洋(4.2)	(11.0)	黄灰	灰白		
10回-11	須恵器	長頸壺	2分の1		(11.2)	(12.7)	灰	褐灰	体部下方外面に叩き痕
10回-12	須恵器	平瓶	体部片	体部径(27.2)	(7.2)	褐灰	褐灰	体部に安堵、力キ目	
10回-13	須恵器	平瓶	把手~体部片	把手2.2×0.9		黄灰	明褐灰		
11回-1	須恵器	甕	口縁部~肩薄片	(16.0)	(8.1)	暗灰	灰		
11回-2	須恵器	甕	口縁部~肩薄片	(18.2)	(6.9)	灰	灰		
11回-3	須恵器	甕	口縁部~肩薄片	(25.0)	(5.9)	灰	灰		
12回-1	土師器	壺	3分の1	(8.8)	(5.7)	橙	橙	底部回転糸切り	
12回-2	土師器	壺	3分の1	(10.0)	(5.6)	2.2 灰黄	2.2 灰黄	底部回転糸切り	
12回-3	土師器	壺	口縁部片	(9.6)	(1.9)	暗黄橙	暗黄橙		
12回-4	土師器	壺	4分の1以下	(10.8)	(4.8)	2.2 暗黄橙	2.2 暗黄橙		
12回-5	土師器	壺	3分の2	(9.6)	4.0	2.7 暗橙	2.7 暗橙	底部孔みあり	
12回-6	土師器	壺	底部のみ		4.0	(0.9) 暗黄橙	(0.9) 暗黄橙	底部回転糸切り	
12回-7	土師器	壺	底部のみ		4.2	(1.1) 暗黄橙	(1.1) 暗黄橙	底部回転糸切り	
12回-8	土師器	壺	体部下方~底部片		(4.4)	(1.4) 暗	(1.4) 暗	底部回転糸切り	
12回-9	土師器	壺	底溝のみ		(4.4)	(1.2) 暗黄橙	(1.2) 暗黄橙	底部回転糸切り	
12回-10	土師器	壺	体部下方~底部片		(4.8)	(1.4) 暗黄橙	(1.4) 暗黄橙	底部回転糸切り	
12回-11	土師器	壺	体部下方~底部片		(6.2)	(1.2) 暗	(1.2) 暗	底部回転糸切り	
12回-12	土師器	壺	体部下方~底部片		5.0	(1.6) 暗黄橙	(1.6) 暗黄橙	底部回転糸切り	
12回-13	土師器	壺	体部下方~底部片		(6.0)	(2.0) 暗黄橙	(2.0) 暗黄橙	底部糸切り	
12回-14	土師器	壺	体部下方~底部片		(6.0)	(2.3) 暗	(2.3) 暗	底部糸切り	
12回-15	土師器	壺	体溝下~底部片		5.5	(1.9) 浅黄橙	(1.9) 浅黄橙	底部糸切り	
12回-16	土師器	壺	体溝下~底部片		(6.4)	(2.1) 暗	(2.1) 暗	底部回転糸切り	
12回-17	土師器	壺	体溝下~底部片		5.6	(2.0) 暗	(2.0) 暗	底部静止糸切り	
12回-18	土師器	壺	体溝下~底部片		6.9	(2.6) 暗	(2.6) 暗	底部静止糸切り	
12回-19	土師器	壺	体溝下~底部片		5.5	(3.0) 暗	(3.0) 暗	底部静止糸切り	
12回-20	土師器	壺	体溝下~底部片		6.4	(3.2) 暗	(3.2) 暗	底部静止糸切り	
12回-21	土師器	壺	体溝下~底部片		(6.0)	(2.1) 暗	(2.1) 暗	底部回転糸切り	
12回-22	土師器	壺	体溝下~底部片		(4.8)	(2.5) 暗	(2.5) 暗	明赤褐	底部糸切り
12回-23	土師器	壺	体溝下~底部片		(6.0)	(3.9) 暗	(3.9) 暗	暗赤褐	底部静止糸切り
12回-24	土師器	壺	3分の2	(15.0)	(6.0)	3.6 暗	3.6 暗	底部糸切り	
12回-25	土師器	壺	3分の1	(15.4)	5.2	5.0 暗	5.0 暗	暗	底部回転糸切り
13回-1	土師器	壺	口縁部~体部下方片	(14.0)		(2.8) 暗	(2.8) 暗	暗	
13回-2	土師器	壺	口縁部~体部下方片	(14.6)		(3.7) 暗	(3.7) 暗	暗	
13回-3	土師器	壺	口縁部~体部下方片	(14.4)		(3.8) 暗	(3.8) 暗	浅黄橙	
13回-4	土師器	壺	口縁部~体部下方片	(15.8)		(3.8) 暗	(3.8) 暗	暗黄橙	
13回-5	土師器	壺	口縁部~体部下方片	(15.2)		(3.7) 暗	(3.7) 暗	暗黄橙	
13回-6	土師器	高台付壺	ほぼ完形	15.0	7.6	6.4 暗	6.4 暗	暗	底部回転糸切り
13回-7	土師器	高台付壺	3分の1	(16.0)	(7.0)	5.8 暗	5.8 暗	暗	

指標番号	種別	器種	残存状況	法量 cm			色調		備考
				口径	底径	器高	外面	内面	
13回-8	土師器	高台付环	底部のみ		(5.8)	(1.5)	明赤褐	褐	
13回-9	土師器	高台付环	体部下方～底部分片		(6.0)	(2.0)	橙	褐	
13回-10	土師器	高台付环	体部下方～底部分片		(6.0)	(2.4)	浅黄褐	暗黄褐	
13回-11	土師器	高台付环	体部下方～底部分片		5.6	(2.1)	浅黄	褐	
13回-12	土師器	高台付环	底部片		5.9	(2.3)	浅黄褐	浅黄褐	
13回-13	土師器	高台付环	体部下方～底部分片		(6.8)	(2.6)	赤橙	暗赤褐	底部削板系切り
13回-14	土師器	台付环	堤部分片		5.0	(1.8)	明黄褐	浅黄褐	柱状高台底部分板系切りの後ナメ
13回-15	土師器	甕	LJ縫隙小片			(2.1)	暗黄褐	暗黄褐	複合！疊
13回-16	土師器	甕	口縁部一部小片	口縁部の桂洋(21.0)		(4.3)	暗黄褐	浅黄褐	複合L疊
14回-1	弥生土器	甕	口縁部小片			(1.2)	淡黄	淡黄	内面に円形浮文の痕跡か
14回-2	弥生土器	甕	LJ縫隙小片	(16.4)		(2.3)	暗黄褐	暗黄褐	口縁部に凹線文2条
14回-3	弥生土器	甕か甌	底溝片		5.0	(2.2)	浅黄	黃灰	

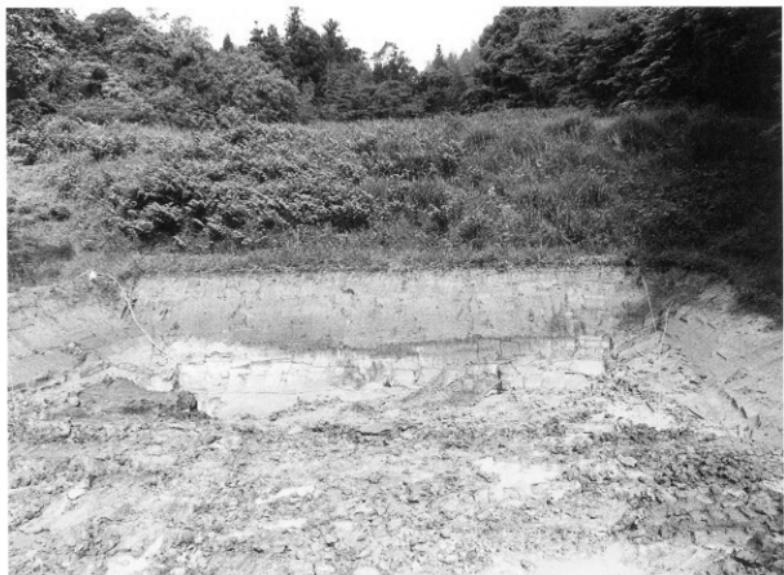
写 真 図 版



調査前遠景（南東から）



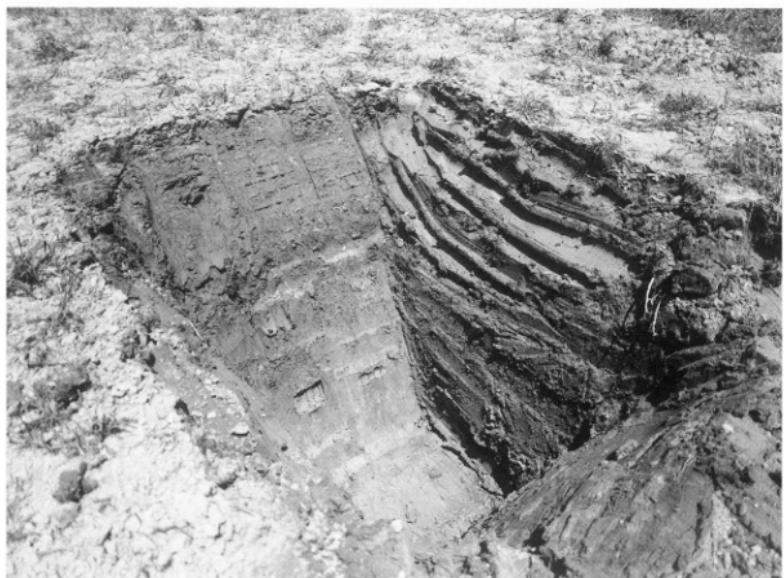
調査前近景（南から）



第1次調査 埋め戻し前（東から）



第1次調査 埋め戻し後（南から）



第2次調査 T-1 (A-A') 土層断面 (南から)



第2次調査 T-2 自然流路跡検出状況 (南西から)



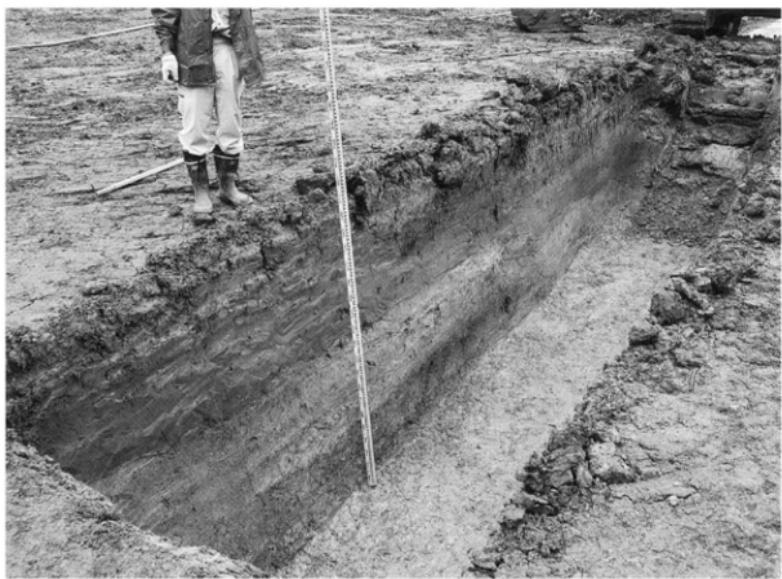
第2次調査 T-1 (B-B') 土層断面（北東から）



第2次調査 T-1 (C-C') 土層断面（南東から）



第3次調査 掘削状況（南西から）



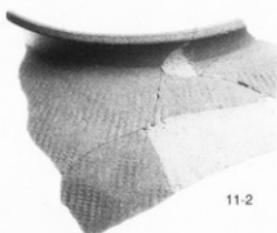
第3次調査 (D-D') 土層断面 (西から)



遺物包含層 出土遺物



11-1



11-2



11-3



12-1



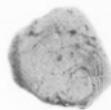
12-2



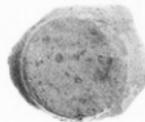
12-3



12-4



12-6



12-7



12-8



12-9



12-10



12-11



12-5

遺物包含層 出土遺物



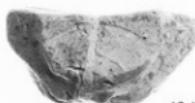
12-12



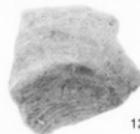
12-13



12-14



12-15



12-16



12-17



12-18



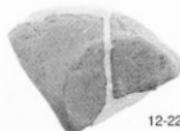
12-19



12-20



12-21



12-22



12-23



12-24



12-25



遺物包含層 出土遺物



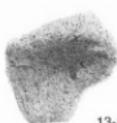
13-13



13-14



13-15



13-16

遺物包含層 出土遺物



14-1



14-2



14-3

自然流路跡 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いしのどういせきはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	石の堂遺跡発掘調査報告書					
副書名	農林振興総合整備事業 ため池等整備事業予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷次						
シリーズ名	松江市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第129集					
編著者名	秦 爰子					
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団					
所在地	〒690-8540 島根県松江市本次町86 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1		TEL: 0852-55-5284 TEL: 0852-85-9210			
発行年月	2009年11月					
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経		
石の堂遺跡	島根県 松江市 岡本町	32201	D-1036	35° 28' 38" ~ 132° 56' 55"	20060511 20060531 20060801 ~ 20060808	280m ² ため池 改修工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
石の堂遺跡	散布地	弥生 古墳 奈良 平安	遺物包含層 自然流路跡	弥生土器 須恵器 上削器	弥生中期の遺物を含むした自然流路跡、弥生終末期～12世紀代の遺物が入り込む遺物包含層を検出。	

石の堂遺跡

平成21(2009)年11月

発行 松江市教育委員会
島根県松江市末次町86番地

財団法人松江市教育文化振興事業団
島根県松江市鳥根町加賀1263-1

印刷 球谷印刷
島根県松江市東長江町902-59